

総合タイトル

大学改革と教養—人文系はいらないのか?—

日 時：2016 年 7 月 14 日（木） 16：20～18：30（5 講時・時間延長）

場 所：マルチメディア教育研究棟 2 階 M206 教室（マルチメディアホール）

事前配付資料

教養教育院総長特命教授による公開の合同講義を行います。この講義は、総長特命教授担当の基礎ゼミ受講者はもちろん、学生・教職員すべてに開かれています。

今回の講義では、共通テーマを「大学改革と教養—人文系はいらないのか?—」とし、前半 45 分の講義を行った後、休憩をはさみ、受講者とともに討論を行います。

【講義】

- | | |
|---------------------------------|--------------|
| 1. 人文系のための ^{アプロキア} 弁明 | 野家 啓一（哲学） |
| 2. ダイバーシティとバリアフリーを目指して | 宮岡 礼子（微分幾何学） |
| 3. 教養は死活的に重要である—シンギュラリティを超えるために | 山口 隆美（生体医工学） |

【討論】

吉野 博（建築環境工学）	座小田 豊（哲学）
高木 泉（数学：数理生物学）	米倉 等（開発経済学、地域研究）

会場の皆さん

【司会】

工藤 昭彦（農業経済学）

◆この資料について◆

この合同講義は受講者の皆さんも参加するひとつの授業です。後半は皆さんにも発言していただきたいのです。この資料はそのために予め、前半に三名の教員が講義する内容の概略を、受講者の皆さんにお知らせするものです。これを読んで感じたこと、質問したいことを準備しておいてください。また、この資料は教養教育院の Web ページからダウンロードすることもできます。

当日講義を聴きながら考えた、あるいは予め考えてきた質問やコメントを質問・コメントシートに記入して、休憩時間に提出してください。その中の幾つかを採り上げて討論の材料とし、残りは教養教育院の Web ページの特集コラムでお答えします。

当日配付する資料の中に、今回の資料の最後にあるような質問・コメントシートを複数枚添付しますので、聞きたい相手（複数指定可）ごとに別の紙に書いてください。

人文系のための弁明（アポロギア）

野家啓一（東北大学総長特命教授）

1. はじめに

日本語で「弁明」と言えば「言いわけ」や「弁解」のように聞こえますが、もとのギリシア語 *apologia* は『ソクラテスの弁明』に見られるように、「法廷など議論の場において自らの立場をはっきりと述べ、事理を明らかにすること」（二宮宏之『マルク・ブロックを読む』岩波現代文庫）を意味する言葉であり、この講義もその原義に倣っています。

2. 文部科学大臣通知（2015/6/8）をめぐって

そもそも「弁明」が必要となった事の起こりは、昨年 6 月に当時の下村文科大臣から出された「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」と題された通知にあります。そこには「特に教員養成系学部・大学院、人文社会系学部・大学院については・・・組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」という文言があったからです。多くの大学人やマスコミは、これを「文系廃止」ないしは「文学部不要論」と受け止め、さまざまな論議を呼び起こしました。

3. 歴史的視点から：知の新旧論争

「理系＝実学、役に立つ」VS. 「文系＝虚学、役に立たない」という通念がはびこりはじめたのは、ヨーロッパでは 17・18 世紀の「科学革命」を経てからのこととあってよいでしょう。日本では戦前の旧制高校における理系／文系の区別、それに伴う理系学生の徴兵猶予といった政策によって、そうした傾向に拍車がかかりました。パスカルの遺稿「真空論序言」には、「書物による学問（文系）」と「推理や実験による学問（理系）」の区別が出てきますが、彼は「役に立つ」といった世俗の価値によって両者の優劣を論じるのではなく、むしろ適切な形で「棲み分け」を行うことを提唱しています。

4. 人文社会系学問の役割

人文学 (*humanities*) はもともと利便性、効率性、有用性といった市場価値には還元できない人間性の探求 (*litterae humaniores*) を目標としてきた学問です。その意味では、人文社会科学は理系の学問と対比して「スローサイエンス」と呼ぶことができます。それは手間ひまをかけた学問的熟成を必要とする点で「スローフード」に似ていますし、また既成の価値の問い直しと組み換えを目指す点で「スローライフ」と軌を一にしています。その観点からすれば、人文社会科学の今日的役割は以下のような方向に求められるでしょう。

- ・ 自明性を問い直す批判的思考力
- ・ 異質の他者を理解し共感する想像力
- ・ 応答可能性 (*responsibility*) に基づくコミュニケーション能力（対話力）

5. おわりに

「人文系の学者が自分たちの住む世界の自然法則や特性についてまったく無知になれるほど、また科学者が詩的情操と芸術的教養を欠いてしまうほど、我々の精神はそんなに貧弱ではありません。」(J. S. Mill 『大学教育について』岩波文庫)

合同講義：大学改革と教養—人文系はいらないのか？— (2016. 7. 14)

「ダイバーシティとバリアフリーを目指して」(教養教育院：宮岡 礼子)

教養とはすぐには役に立たないもの。しかし「教養がない」と言われるのは、「数学ができない」,
「英語ができない」と言われるよりはるかに深刻。なぜか。教養はどうすれば身につくのか？
大学の大量化で、真のエリートとよばれる人材を育てることよりも、「すぐに役に立つ」人や物
が求められるようになった。しかし、**すぐに役に立つ物はすぐに役に立たなくなる。**

今までの日本：官僚は圧倒的に東大法科卒(文系)男性。企業のトップもそう。学校では正答が
必ず一つある多肢選択式問題を解き、他人に言われたことを鵜呑みにして覚えた。他方、社会
はグローバル化、多極化、情報化し、国内では若年人口急減、需要の減少、社会保険費の急増
など、今までなかった問題が山積している。大局に対応できる人材を育成するには、一見無駄
に見えても専門外の「教養教育」が必須である。少なくともそういう教育を施す大学があつて
もよい。いや、なければならない。このことについて、次の二つの観点から考える。

理系と文系、いろいろなバリアをなくそう

- ・ 理系：論理で事象を説明するが、対象や問題そのものの価値は問わない。主として左脳を働かせる。
- ・ 文系：イメージを重んじ、存在理由やその価値を問う。主として右脳を働かせる。
- ・ 複数路線を目指す：文系（右脳）の人は理系を、理系（左脳）の人は文系を学ぼう。
→ 例えば理系の人：歴史はいろいろなことを教えてくれる（人類の過ち、成功）
文系の人：生物学は理系と文系の両方をつなぐ（生命の継承）。

多様性（ダイバーシティ）の推奨

- ・ 女性、子供がもっと関わるのが重要。（女性：ケアの心がある。子供：正直）
- ・ 女性脳の特徴：右脳と左脳をつなぐ脳梁が男性より 20%太い。→ 女性は同時に多くのことができる。マネジメントに強い。

幅広く教養を学びつつ、結局自分は何をするのか？

- ・ 不得手なことを克服→ せいぜい普通レベル
- ・ 得意なことを貫く→ トップへの道（東北大生に目指して欲しいこと）
- ・ トップとしての判断ができる人間になる。そのための素養が教養。

とりあえず何をするか？

- ・ 4つのC+1。私からの皆さんへの提案をお楽しみに。

教養は死活的に重要である—シンギュラリティを超えるために

教養教育院総長特命教授 山口隆美

今回の合同講義では、教養教育というよりは、大学教育、さらには広く高等教育における文系・理系の区別と差別、そして、近年、文科省の政治家と官僚諸君が主張する文系の専門組織（学部、大学, etc）の不要論を議論することになった。私は、現役の教授であった時は、工学部機械系に席をおき、工学系の学生の指導に当たっていたので、いわば、文系否定論の提示を期待されて講義することとなった。しかし、私は、文系否定論には全く与しない（ホントは、文系否定論をぶつと面白いかも知れないんだが）。その理由を以下に示す。

- (1) 真の高等教育においては、いわゆる文系学問が必須である。

高等教育においては先端的で高級と思われることほど、あっという間に陳腐化する。工学部で言えば、最先端の学問の賞味期限は実感として5年くらいである。また、そうでなければ学問の進歩はない。従って、逆説的であるが、古くて安定している基礎教養こそが陳腐化せず、次のイノベーションの基礎となる。それは、人間の営みを反省する歴史と思考の礎—哲学である。これなくして大学教育はない。実利的に言っても、学生諸君のこれから数十年におよぶ人生を考えると、現在の専門に拘ることは未来を閉ざすことになる。

- (2) 2045年に到来するとされているシンギュラリティを超克するためには、教養教育が死活的に重要である。

人工知能が長足の進歩を遂げて、人間の究極の才能の一つである囲碁において世界最強の棋士を圧倒的に破った。このことは、記憶とパターンマッチングを中心とする知的営みでは、現在すでに、人間は機械に勝てないということを意味している。文献情報など既成の知識を記憶し検索することで成り立つ、いわゆる高等な専門職（弁護士、会計士、内科医など）がすべて機械に置き換えられる日は近い。そのとき、絶対に機械知能にできないであろうことは、想像（＝創造）である。想像力を鍛えて開花させる教育、そしてそれを現実に適用させる技術は、文系・理系を問わず今後の高等教育の鍵となる。それが教養である。

- (3) 人間というものの価値を維持する上で、高等教育はむしろ文系の教養科目の教育を強化しなければならない。

人工（機械）知能が発達して、人間の仕事を奪うことにより、社会において人間の価値は必然的に低下する。現在進行中の社会における格差の増大は、その表れである。実用的な技術教育も価値の低下が避けられない。自動車や飛行機の人工知能による操縦が全面的に可能となったときに、外科医の仕事はあるだろうか。一方において、無反省な人工知能の開発者は、その開発する人工知能が誰に奉仕し、誰を排除・疎外するかについて、絶望的なほどに無知である。この問題は、結局資本主義の問題であり、資本の軛から自由な人間の生を取り戻すこと、あるいは、その必要性を深く心に刻むことが決定的に重要である。とりわけ、世界を無意識のうちに変革している技術者に対する基礎教養教育の重要性は言い尽くす事ができない。彼らが作るものが世界を破滅させないために。

[質問・コメントシート見本] A5 カラー用紙

東北大学教養教育院 総長特命教授合同講義
「大学改革と教養—人文系はいらぬのか?—」
2016年7月14日(木) 16:20~18:30 マルチメディア教育研究棟 M206

質問・コメントシート

学籍番号		所属		氏名	
◇講義内容に関する質問・コメント(どの講義かチェックしてください)					
<input type="checkbox"/> 野家 啓一 <input type="checkbox"/> 宮岡 礼子 <input type="checkbox"/> 山口 隆美					
(質問・コメント)					
◇講義内容以外の質問・コメント					
(質問・コメント)					